

## 流氓ユダヤの神戸：ユダヤ難民と丹平写真倶楽部

加藤哲平（九州大学） kato@fkc.kyushu-u.ac.jp

### 加藤哲平（かとう・てっぺい）

- ・1984年、青森県八戸市生まれ。山梨県甲府市育ち。福岡市在住。
- ・同志社大学より博士（神学）、米国ヒブル・ユニオン・カレッジより M.Phil. in Judaic, Hebraic, and Cognate Studies 取得。
- ・エルサレム・ヘブライ大学ロスバーク国際校客員研究員、日本学術振興会特別研究員 PD、追手門学院大学常勤講師などを  
経て、現在、九州大学大学院言語文化研究院助教、同志社大学一神教学際研究センターリサーチフェロー。
- ・専攻、聖書学、ユダヤ学。特にギリシア・ローマ時代のユダヤ・キリスト教文学と、日本におけるユダヤ教史。
- ・著書、『ヒエロニムスの聖書翻訳』（教文館、2018年。第3回日本基督教学会賞受賞）。
- ・訳書、『死海文書Ⅲ：聖書釈義』（共訳、ぶねうま舎、2021年）。
- ・日本ユダヤ教史に関する業績として、「流氓ユダヤの神戸：ユダヤ難民と丹平写真倶楽部」『関西ソークル』第3号、2016  
年、61-81頁。「ラビ・オカモト：日本人最初のラビの生涯」『ユダヤ・イスラエル研究』第39号、2025年、1-16頁。

### ◆講演の流れ

1. 日本におけるユダヤ人共同体の歴史——長崎、横浜、神戸、東京
2. ワルシャワから神戸へ——ユダヤ難民と杉原ヴィザ
3. 神戸におけるユダヤ難民
  - 3-1. ユダヤ人協会の活動とユダヤ難民の構成
  - 3-2. 正統派のユダヤ教徒と日付変更線の問題
  - 3-3. 新聞報道、小辻節三の活動、神戸行政機関の対応
  - 3-4. 神戸市民の好意
4. 丹平写真倶楽部と「流氓ユダヤ」
5. まとめと展望

### ◆まとめ

- ・日本におけるユダヤ人共同体の歴史（特に神戸が重要）
- ・日本の知識人→反ユダヤ主義の迷妄に囚われていた
- ・ツヴァルテンダイク→杉原千畝→根井三郎→建川美次  
→大迫辰雄→小辻節三
- ・日本の物理的のみならずユダヤ法的な遠さ
- ・神戸ユダヤ人協会の貢献
- ・市井の人々の好意
- ・丹平写真倶楽部「流氓ユダヤ」のまなざし

### ◆展望

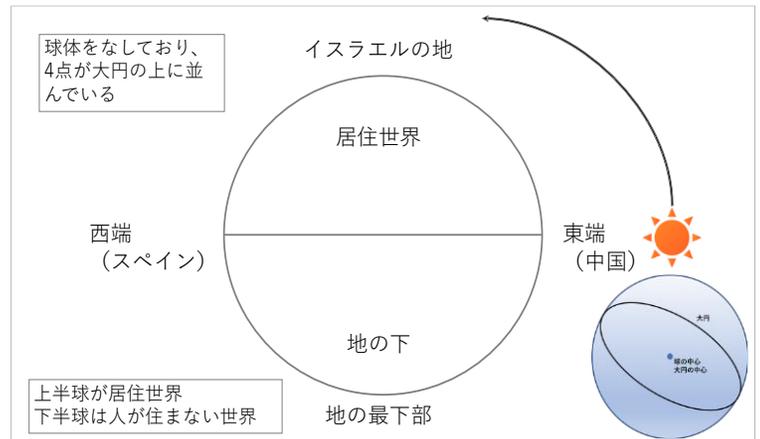
- ・敦賀と神戸を日本におけるユダヤ研究の中心地に
- ・国内のユダヤ学会と共に日本ユダヤ教史を確立し、世界のユダヤ学と国際的な共同研究を
- ・敦賀と神戸で蓄積のあるユダヤ難民や杉原千畝の研究に、ユダヤ学の視点を

### ■ユダ・ハレヴィ『クザリ』2.19-20（上の図1 [志田雅宏作成] を参照）

19. ハザル王：日は本来、中国で最初に夜明けを迎えるものとして計算されていなかったか？ なぜなら中国は居住可能地の東端を成すから。

20. ラビ：安息日の始まりはシナイ山、より正確にはマナが最初に降ったアルシュから計算されねばなりません。したがって安息日は、太陽がシナイ山の背後に沈んでから、さらに遙か西へ、地球を回り、人の住む地の果てである中国に至るまで始まりません。安息日は中国ではエレッツ・イスラエルより18時間遅れて始まります。なぜなら、エレッツ・イスラエルが世界の中心にあるからです。したがってエレッツ・イスラエルの日没は中国の真夜中と一致し、エレッツ・イスラエルの正午は中国の日没と一致します。これが規則における18時間に基づく体系の問題点です。（中略）

したがって、18時間を週の日の命名基準とせねばなりません。なぜなら、日の命名が始まったエレッツ・イスラエルと、命名開始時の太陽の位置との間には6時間の差があるからです。したがって、安息日という名前は、太陽が極西に昇った、日の始まりに用いられましたが、それはエレッツ・イスラエルのアダムにとっては日没のときでした。それは「安息日の始まり」の名前を維持し、18時間後に彼にとって太陽が天頂に達するまで続けました。そのとき中国では夕方であり、そこでもまた安息日の始まりでした。これが安息日と呼称される日の極限です。なぜなら、さらに向こうの地域は単に「私たちから見て日の数え始めの場所の東側」と呼ばれるに過ぎないからです（מה שיש אחריו אמןם נקרא קשהוא מזרח למקום שממנו מתחילים הימים）。



(図1)

しかし、同時に極西であり東の始まりでもある地点が存在するに違いありません。エレッツ・イスラエルにとって、これは律法の観点だけでなく自然科学の観点からも、居住世界の始まり (תְּחִלַּת הַיְשׁוּבָה) なのです。なぜなら、週の曜日が世界中で同じ名称を持つことは不可能だからです。(中略)

しかし、その日の呼び名が異なる地域間の差が生じる範囲は、ちょうど 18 時間に及びます。ある子午線の住民がまだその日を安息日と呼んでいる間、別の子午線の住民は既にその日を過ぎています。こうして安息日が始まり、エルサレムで太陽が天頂に達した時刻から 18 時間後まで続きます。その時こそ、安息日という名称が終わるのです。したがって、その日を安息日と呼ぶ者は存在せず、皆翌日を呼びます。(中略) 安息日の名称はあらゆる場所で日曜日に置き換わりますが、エレッツ・イスラエルでは既に安息日が過ぎ去り、日曜日の真っただ中に入ったのです。この規則の意図は、同じ曜日の名称が全世界で通用するようにし、中国と西洋の住民双方に「新年をどの日に祝ったか」と問うことが可能となることでした。答えは「安息日に」となるはずですが、後者の人々が祝祭を終えていた一方で、前者はエレッツ・イスラエルに対する自国の地理的位置により、まだ祝祭を続けていたにもかかわらず、週の曜日の名称に関しては、両者とも同じ曜日を守っていたのです。

このように『主の安息日』と『主の祭日』の認識は、『主の相続地』である土地に依存しており、あなたが読んだように、それは『主の聖なる山』(詩 99:9)、『主の足台』(詩 99:5)、『天の門』(創 28:7)とも呼ばれます。律法はシオンから出るからです(ミカ 4:2)。(後略)

## 二次文献表

### ●日本ユダヤ教史

- “Yokohama,” *Encyclopaedia Judaica* (2 ed.), 21 (2006): 381.
- Ezra, N.E.B. “Nagasaki,” *Jewish Encyclopedia* 9 (1905): 141.
- Dicker, Herman, *Wanderers and Settlers in the Far East: A Century of Jewish Life in China and Japan* (New York: Twayne Publishers, 1962).
- Kublin, Hyman, “Kobe,” *Encyclopaedia Judaica* (2 ed.) 12 (2006): 242.
- Kublin, Hyman, “Nagasaki,” *Encyclopaedia Judaica* (2 ed.) 14 (2006): 728.
- Kublin, Hyman et al., “Japan,” *Encyclopaedia Judaica* (2 ed.) 11 (2006): 81-85.
- Lury, Robert M., “Jews in Japan,” *Yearbook of a Congregation in Tokyo, Japan, 1956-57*, 20-22.
- Parfitt, Tudor, *The Thirteenth Gate: Travels among the Lost Tribes of Israel* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1987), 88-119.
- Pin, Silvia, *Jews in Japan: Presence and Perception: Antisemitism, Philosemitism and International Relations* (Berlin: De Gruyter Oldenbourg, 2024).
- Postal, Bernard, “Japan,” *The Universal Jewish Encyclopedia* 6 (1948): 38-40.
- Sato, Izumi, “A Study on the Transmission/Acquisition Process of Ethnic Culture among Jewish Families in Japan : Case Studies in Tokyo and Kobe,” 『東洋女子短期大学紀要 = *The Toyo review*』 23 (1991): 153-163.
- Tokayer, Marvin, and Steve Hall, “Jews in Japan,” *Encyclopedia of the Jewish Diaspora* 3 (2009): 1196-1203.
- 市川裕・牧野素子／大内宏一編「第 11 章：アジア・日本との関わり」、日本ユダヤ学会編『ユダヤ文化事典』丸善出版、2024 年、395-429 頁。
- 内田樹『私家版・ユダヤ文化論』文春新書、2006 年。
- 加藤哲平「流氓ユダヤの神戸：ユダヤ難民と丹平写真倶楽部」『関西ソーカル』第 3 号、2016 年、61-81 頁。
- 加藤哲平「ラビ・オカモト：日本人最初のラビの生涯」『ユダヤ・イスラエル研究』第 39 号、2025 年、1-16 頁。
- 川上義和「神戸とユダヤ人」『ナマール』第 11 号、2006 年、5-16 頁。
- コーネル、ロテム、ウィリアム・ジャーヴェイス・クラレンス＝スミス「日本のユダヤ人：ビジネスコミュニティがたどる紆余曲折の道」、コーネル編著(滝川義人訳)『近代アジアのユダヤ人社会：共同体の興隆、終焉、そして復活』明石書店、2024 年、348-73 頁および 453-60 頁。
- グッドマン、デイヴィッド、宮澤正典『ユダヤ人陰謀説：日本の中の反ユダヤと親ユダヤ』講談社、1999 年。
- 佐藤泉「滞日ユダヤ人家族における民族的文化の伝達・継承に関する一考察」『民俗学研究』第 53 巻第 2 号、1988 年、178-205 頁。
- 佐藤泉「在日ユダヤ人コミュニティにおける民族的文化の伝達・継承に関する一考察：東京・神戸の事例を中心に」『九州人類学会報』第 18 号、1990 年、34-39 頁。
- 佐藤泉「在日ユダヤ人における民族的アイデンティティの伝達・継承・喪失に関する一考察」『東洋学園大学紀要』第 6 号、1998 年、39-46 頁。
- 佐藤泉「在日ユダヤ人コミュニティの変遷：正統派と女性への対応を中心として」『東洋学園大学紀要』第 18 号、2010 年、193-205 頁。
- 佐藤泉「草創期における在日ユダヤ人コミュニティ：神戸・横浜・東京」『東洋学園大学紀要』第 32 号、2024 年、199-214 頁。
- シロニー、ベン・アミー(仲山順一訳)『ユダヤ人と日本人：成功したのけ者』日本公法、1993 年。
- シロニー、ベン＝アミー(立木勝訳)『ユダヤ人と日本人の不思議な関係』成甲書房、2004 年。
- シロニー、ベン・アミー、河合一充『日本とユダヤ：その友好の歴史』ミルトス、2007 年。
- 高尾千津子「シベリア出兵と『シオン議定書』の伝播 1919-1922」『ユダヤ・イスラエル研究』第 27 号、2013 年、23-36 頁。
- 中西雄二「神戸における自系ロシア人社会の生成と衰退」『人文地理』第 56 巻第 6 号、2004 年、91-107 頁。
- 畠山保男「ユダヤ人コミュニティと神戸シナゴグ」、関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『ミナト神戸の宗教とコミュニティ』神戸新聞総合出版センター、2013 年、175-207 頁。



2022年、81-101頁。

古江孝治「杉原サバイバーの追跡調査：「命のビザ」で日本に入国した避難民、2033人の記録」『日本海地誌調査研究会会誌』第22号、2023年、45-66頁。

マウル、ハインツ・E（黒川剛訳）『日本はなぜユダヤ人を迫害しなかったのか：ナチス時代のハルビン・神戸・上海』芙蓉書房出版、2004年。

松井繁松「回想録その1：欧亜連絡列車に添乗して」『観光文化』第151号1月号、2002年、10-11頁。

松本正三「神戸におけるユダヤ難民の足跡：新聞資料を中心に」、神戸外国人居留地研究会編『近代神戸の群像：居留地の街から』神戸新聞総合出版センター、2023年、330-51頁。

丸山直起『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』法政大学出版局、2005年。

宮澤正典「日本への避難ユダヤ人と新聞」『ユダヤ・イスラエル研究』第11号、1988年、43-49頁。

宮澤正典「神戸におけるユダヤ避難民：1941年4月～9月を中心に」『ナマール』第1号、1996年、38-49頁。

山田純大『命のビザを繋いだ男：小辻節とユダヤ難民』2013年、NHK出版。

山本尚志『「猶太人対策要綱」の諸起源について』『ユダヤ・イスラエル研究』第26号、2012年、65-76頁。

### ●杉原千畝

Kowner, Rotem, “Sugihara Chiune in Israel: A Delayed Reception,” *Darbai ir dienos* 67 (2017): 255-62.

Kowner, Rotem, “A Holocaust Paragon of Virtue’s Rise to Fame: The Transnational Commemoration of the Japanese Diplomat Sugihara Chiune and Its Divergent National Motives” *The American Historical Review* 128/1 (2023): 31-63,

アルトマン、イリヤ（岡林菜穂訳）「ロシアおよび海外公文書館における『正義の人』杉原千畝に関する新たな文書の発見：国際協力の経験と展望」『Asia Japan Journal：アジア・日本研究センター紀要』第11号、2015年、61-68頁。

菅野賢治『「命のヴィザ」の考古学』共和国、2023年。

岐阜新聞社編集局「千畝の記憶」取材班編『千畝の記憶：義父からたどる「杉原リスト」』岐阜新聞社、2020年。

白石仁章「杉原千畝研究の現状と展望」『ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研究』第49号第4号、2001年、87-94頁。

白石仁章『杉原千畝：情報に賭けた外交官』新潮社、2015年＝『諜報の天才杉原千畝』新潮選書、2011年。

杉原幸子『六千人の命のビザ』大正出版、1993年。

杉原幸子（監修）、渡辺勝正（編著）『決断・命のビザ』大正出版、1996年。

ストレルツォーバス、シモナス（赤羽俊昭訳）『第二次大戦下リトアニアの難民と杉原千畝：「命のヴィザ」の真相』明石書店、2020年。

古江孝治「北満（東清）鉄道譲渡交渉：交渉過程を中心として」『日本海地誌調査研究会会誌』第14号、2015年、110-32頁。

古江孝治「杉原千畝・生誕地の真実：戸籍は語る」『日本海地誌調査研究会会誌』第16号、2017年、86-108頁。

古江孝治「杉原千畝と満洲・ハルビン：早稲田大学から満洲国外交部まで」『日本海地誌調査研究会会誌』第18号、2019年、5-23頁。

古江孝治『杉原千畝の実像：数千人のユダヤ人を救った決断と覚悟』ミルトス、2020年。

渡辺勝正『真相・杉原ビザ（改訂版）』大正出版、2015年〔2000年〕。

渡辺勝正『杉原千畝の悲劇：クレムリン文書は語る』大正出版、2006年。

### ●丹平写真倶楽部

「彷徨よへる猶太人」『寫真文化』1941（昭和16）年5月号。

『安井仲治：モダニズムを駆けぬけた天才写真家』新潮社、1994年。

浅倉拓也「戦時下のユダヤ難民」、朝日新聞社「写真が語る戦争」取材班編『朝日新聞の秘蔵写真が語る戦争』朝日新聞出版、2009年、166-70頁。

有木宏二「はじまりとしての呼びかけ：『流氓ユダヤ』のために」『日本文化環境論講座紀要』第2号、2000年、51-62頁。

河野博子「“流浪の民” 東の間の安息 ナチス迫害で神戸に逃れたユダヤ人 カメラがとらえる」『読売新聞』東京朝刊、1996（平成8）年1月21日、31面。

小林公『「流氓ユダヤ」：戦時の群像、神戸の記憶』、兵庫県立美術館編『レトロ・モダン神戸：中山岩太たちが遺した戦前の神戸』兵庫県立美術館、2010年、103-6頁。

相良周作「もうひとつの『神戸風景』：『流氓ユダヤ』と戦中から終戦後にかけての神戸」、兵庫県立美術館編『レトロ・モダン神戸：中山岩太たちが遺した戦前の神戸』兵庫県立美術館、2010年、85-98頁。

菅谷富夫『「流氓ユダヤ」の記憶』『大阪人』第56巻10月号（特集：昭和の前衛写真、丹平写真倶楽部）、2002年、44-48頁。

菅谷富夫「前衛写真家たちのモダン都市」『CEL』第77号、2006年、86-89頁。

田淵銀芳「男」『アサヒカメラ』第32巻7月号、1941年（昭和16年）、12頁。

中島徳博「連作『流氓ユダヤ』の背景」『ピロティ：兵庫県立近代美術館ニュース』第77号、1990年、7頁。

中島徳博『「流氓ユダヤ」について（二）』『ピロティ：兵庫県立近代美術館ニュース』第102号、1997年、6頁。

中島徳博「安井仲治と『丹平写真倶楽部』」『大阪人』第56巻10月号（特集：昭和の前衛写真、丹平写真倶楽部）、2002年、20-23頁。

吉田忠司「大阪写真界史：写真表現の草創期から新興写真の興隆期まで」『大阪人』第56巻10月号（特集：昭和の前衛写真、丹平写真倶楽部）、2002年、17-19頁。